

平成 21 年度 スタンフォード大学海外研修 派遣報告書

近畿大学医学部奈良病院 放射線部 渡辺恵美

8/2-8/9 にスタンフォード大学研修に参加させていただいた。与えられたテーマと私自身が印象づけられた言葉を関連させて述べさせていただく。

1. 参加した目的と達成度について -マルチモダリティの時代-

私は今回の研修の目的として以下の 6 つを学ぶことに設定した。

最新の Imaging 技術と放射線治療

日米の技師教育制度の比較

スタンフォード大学病院のスタッフ体制と日米の構造比較

乳癌診療に関して

ペイシェントケア技術と安全管理

今後の Radiology について



Moseley 先生と筆者 Yes, Perfect のポーズ

アメリカの方は人を勇気づける方法が非常にうまいと思った。研修生の誰もが一度はこのポーズをしたはず？

実際の達成度としては満足のいくもの、そうでないものがあった。一週間という限られた中で～～を学びきることは、ハードながらも楽しめた。今回一番得られたものは、人との出会いであった。その出会い一つ一つが今後継続して学んでいくための良いきっかけづくりとなったように思う。紙面の都合上全体的なことを記載する。

最新の技術で印象的だったのは molecular imaging(MI)であった。MI lab の見学で、一つのモダリティでは不可能なこともマルチモダリティで可能にしていくといった話を聞いた。まさに MI だけでなく放射線診療全体の方向性を指している。今までの解剖学的画像から MI、そして Biomarker, Biocomputation と未来へ広がる放射線診療を垣間見ることができた。

2. アメリカの放射線診療の利点と問題点について -患者中心の医療はどちら？-

アメリカの放射線診療といえば、日本と異なり各スタッフが非常に分業されていることで知られている。臨床と研究の横断的つながりもしっかりしていた。何でも行う日本人は知りすぎるのかもしれない。しかし全体像が見えないまま診療が行われている点では、全体像の見える日本の方が良いと思った。「アメリカでは医療費も高く、まだまだ患者中心の医療という考え方からはほど遠い。まだ日本の方がこの思想は発展しているのではないか。」という意見があるアメリカの医師から聞いた。医療保険制度の面からも、もしかしたら患者中心の医療としては日本の方が近いのかもしれない。

3. 今回の研修で得られた成果を今後どのように活かすか -visible radiologic technologists へ-

研修最後の日に Glazer 教授が visible radiologist を目指したいとおっしゃっていた。そして我々放射線技師も同じように目指してはどうかと。マルチモダリティ、患者中心の医療、-visible radiologic technologists-これらについては目新しい言葉でもなく、日本でもよく言われている。研修の終盤でアメリカの技師さんが言った言葉に共感した。(私の勝手な意訳混じり)「検査、治療する上で患者さんを一番知っているのは私たち放射線技師。目に見える形で患者さん中心の医療として何ができるかを考えることは、どのスタッフでも同じこと。業務が分担されているとはいえ、できる最善のことをする。」患者中心の医療を行っていくためにマルチモダリティ技術で貢献できる visible radiologic technologists を目指すという方向性は、国や制度が違えども同じではないかと強く感じた。今回の研修を有效地に活かす方法は、この日本でこの方向性を胸に、活動し人に伝えていくことではないかと思う。濃厚な時間を過ごしたかけがえのない仲間と一緒に、である。

最後に、今回の研修にあたり快く送り出して下さった近畿大学医学部奈良病院竹田技師長をはじめ病院のスタッフの皆さんありがとうございました。そしてこのような貴重な経験をさせてくださった日本放射線技術学会、広島大学木口雅夫団長、現地で研修のスタッフとしてお世話をしてくれた GE ヘルスケアの方々、研修に関わったすべての皆さんに感謝の意を表して研修報告を終わらせていただきます。